

ほとけの混和会だより

天台智者大師



「御大師様の放生会」

平成二十七年十二月

東光院

仏の混和会

第116号

十一月十六日（火曜）
 印西市 和泉の泉倉寺に於いて檀信徒並びに近隣の住職、総勢五十名の参加のもとに天台智者大師様の報恩法要を法華懺法にて執り行われしました。
 天台智者大師様は、中国梁の時代西暦五三八年荊州華容県（湖南省）で誕生されて、西暦五九七年十一月二十四日享年六十歳にて遷化されました。
 その天台智者大師様は、お釈迦様の説かれた教えを

一つ一つ整理されて、その中でも法華経が一番尊くすぐれた教えであることを確信されて、中国の天台山にて、法華経を中心とした教えを広められ、中国でのお釈迦様の生まれ変わりと呼ばれておりました。
 ある日、天台大師様は「私達はいくつ命を頂いて生かされている。他の命を粗末にしたのでは私達は生きることは出来ない。無益な殺生を謹むように」と無残に殺されている魚を哀れみ、漁師より魚を買い取り上記の絵の如く魚を海に放してあげました。
 以来、人々は様々な命に感謝を捧げ、他の命を尊ぶ慈愛心が芽生えて行きました。
 その御教えは、鑑真和尚によって日本に伝えられると、聖徳太子はその教えを元に日本で初めて十七条の憲法を制定されたのです。
 その後、法華経の教えは奈良で勉強をしていた伝教大師最澄様の目にとまり、大変感激されて全書を書き写し、比叡山に持ち帰り勉強に励まれ、さらに桓武天皇の許可を得て遣唐使と共に中国に渡り天台山を尋ねて研鑽を深め帰国の後に日本天台宗を開かれたのです。

ねーねーお坊さん
 とこで、「法華懺法」で法要を行ったと言ったけど、これは何を、どうしたのですか？



そうじゃなー
 詳しくは説明出来ないのじゃが
 簡単に言うと、天台大師様の示された法華経の教えを会得する修行の法要を行ったと言ったら解りやすいかな。
 先ず、みんなで三宝に帰依し礼拝することから始まるのじゃよ。
 三宝と言うのはね、
 仏、(ブツ)とは大自然大宇宙そのものでもあるのじゃよ
 法、(ダルマ)とはブツの教えなんじゃが、大自然の成り立ちと解釈しても良いよ。
 僧、(サンガ)とはブツの教えの元に集う仲間と言っても良いかな。
 この三宝に「何時もお守り頂きありがたう御座います。」と感謝の念を捧げたのじゃよ。
 そして私達は何時も、己の「六根」、眼、耳、鼻、舌、身、意、から得た情報を、己の個人的な価値観で判断し、執着しむさぼり、とられて様々な人々に迷惑をかけた、争ったり、自ら過ちや、迷いを招き、

苦しみながら毎日を生きているのじゃ。その知らず知らずの内犯してしまっただ様な過ちに對して、素直な気持ちで、申し訳御座いませんと懺悔の念を捧げたのじゃ。
 余談じゃが、おかし富士山に登山するときは「懺悔懺悔六根清浄」「ざんげ、ざんげ、ろっこんしようじよう」と、かけ声をかけて己の身を清めながら登られたそうじゃ。それとおなじなんじゃよ。
 そして、すべての行いに對して、己の修行「菩薩行」と受け止めるのじゃよ。
 たとえば、「私が〇〇をこれだけ一生懸命にやっているのに、あの人は何もしていない」と言うような不平不満、そして人のそしりや侮辱に對しても「あの人は、人を非難中傷することしか出来ない心の狭い人なんだな、どう接してあげたら良いのかな」などと、人々の怠りや侮辱にもとられない、広く大きな包容力を会得する修行「忍辱行」などを習得するのじゃよ。
 すると、己の怒りやいらだちは、次第におさまり、何時も心は静かに、ストレスも無く、穏やかな毎日を歩むことが出来るのじゃよ。そして私達も次第に仏様のような大きな慈愛心に目覚、仏様「ブツ」になれるのじゃよ。共に努めていこうね。
 亮観拝

日本の仏様



これまで日本仏教における仏様の分類について紹介してきました。今回より、日本の仏様について紹介していきます。
 ●如来部 釈迦如来

釈迦如来はお釈迦様と呼ばれるインドに実在した人物の事であり、多くの仏様や仏像の起源となった最初の仏様です。

お釈迦様の本名はゴータマ・シッダールタといい、今から約二五〇〇年前、ネパールにあるルンビニ園という地で一国の王子として生まれました。結婚もし、子供もいましたが二十九歳の時に出家し、六年の苦行の後、瞑想に入り悟りを開きました。お釈迦様は弟子と共にインド各地で教えを説き歩き、最後インドのクシナガラという地にて、八〇歳で亡くなりました。

死後、お釈迦様の遺骨は分骨され、各地に遺骨を祀る塔を造り人々は塔を敬い信仰の対象としました。塔にはお釈迦様の生涯や教えを装飾として掘られました。しかし、お釈迦様は足跡や座った台座といった物で表現され、お釈迦様本人を直接表現する事はありませんでした。かつてのインドでは、神や聖人の姿

を形に表現することは禁じられており、お釈迦様も聖人であると考えられ、今のよう像を作ることはありませんでした。

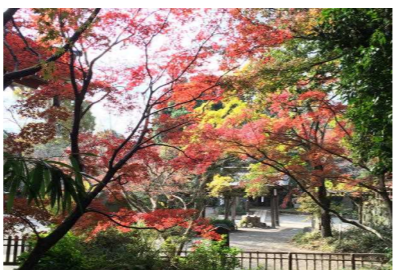
しかし、西暦二世紀ごろに西洋の彫刻文化がインドに入り、禁じられていたお釈迦様の像も作られるようになりました。その際、当時のインド人は、お釈迦様の像を聖人ではなく如来であると呼び、「如来とは真理の世界から人々を救うためにこの世に来てくださった存在でありお釈迦様も如来である。如来はその辺の聖人とは格が違うのだから表現してもよい」と説明しました。

その後、お釈迦様は人々を救うためにこの世に来てくださった如来であるという見方が広まり、お釈迦様はいつしか釈迦如来と呼ばれるようになりました。
 当時の人々は、禁止と知りながらも、どうにか生きていた頃のお釈迦様にお会いしたい言う思いから必死に像を作ったのかと思えます。 亮澄拝



上野公園内にある上野大仏。かつては六メートルもある釈迦如来像でした。

冬になりました



朝夕の冷え込みも増し、境内の木々も紅葉を迎えた今日この頃、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

法助先の深大寺では七、五、三のピークが過ぎ、大勢のお子さんとそのご家族がお参りに見えました。晴れ着を着たお子さんの前でお勤めをしていると、当時の自身を思い出し、時の経過を実感させられます。

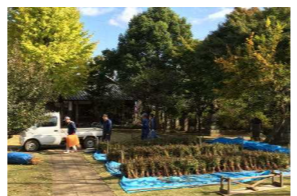


そばの刈り入れ。脱穀をしました。

さて、話かわって先日、そばの刈入れ・脱穀を行いました。以前お伝えしたように、今年も過去にないほどの不作であり、その収穫に当たっては少人数で行いました。とはいえ作付面積は例年通りの為、手伝って頂いた松山さん、大



湯さん、柳田さん、ご夫婦、宮崎洋さん、勝行さん、金崎さん等々には苦勞を強いてしまい、本当に感謝いたす次第でございます。
 脱穀においても、同様の理由で数人で行いましたが、唐箕(とうみ)をかけて最終的に残った量をみてびっくり。昨年の半分(最盛期の五分の一)にも満たず、ますます貴重な蕎麦の実となりました。
 これからは、乾燥、製粉作業を得て、年末の大掃除の際には何とか、今年の新そばをお楽しみ頂けるかと思えます。



ちなみに、深大寺そば一味会では例年よりも豊作とすることでした。改めて農業の難しさを実感させられます。 亮敬拝

